

Bernard B. Fall: *The two Viet-nams, a political and military analysis* Frederick. A Praeger, New York, 1963

著者は第2次世界大戦中、フランスの抵抗運動に参加し、現在はHarvard 大学教授として、インドシナ地域の国際政治を専攻している。本書のほか、*Street without joy: Insurgency in Indochina, 1946-1963* を著している。

本書は3つの部分に分れており、第1部は南北ヴェトナムの背景を歴史的に素描している。すなわちフランスの植民地時代から、日本軍による占領をへて、ヴェトナム独立戦争が始まるまでが75頁の中に要領よくのべてある。

第2部は北ヴェトナムを取りあつかい、6. ホー・チー・ミンの抬頭、7. ディエン・ビエン・フーへの途、8. 兵營国家、および9. 「社会主義への途」の4章約120頁からなっている。著者は最近北ヴェトナムを訪問し、非共産主義者の欧米人としては、恐らくはじめてホー・チー・ミンにも会っているの、北ヴェトナムの最高指導者と政治情勢についての著者の記述と評価とは、きわめて高い価値を持っていると思う。

しかし、何と云っても、本書の中で、一番重要な部分は、南ヴェトナムをあつかった第3部であろう。第3部は量的にも200頁に近く、質的にも、もっとも精彩に富んでいる。中でも、特にすぐれているのは、「叛乱—神話と事実」と題した第16章である。ここで著者は、革命的ゲリラ戦争の場合に、ジャングル戦争とゲリラ戦争とを混同して住民の動向が勝敗を決する鍵であることをややもすると忘れがちなアメリカの支配的な見解をきびしく批判している。革命的ゲリラ戦争では、毛沢東がたくみに表現したように、ゲリラは魚であり、ゲリラを支持する住民は水である。水が涸れれば、魚は死にたえるが、水がゆたかになれば、魚は勢力を増す。アメリカの軍部も国務省も、南ヴェトナムのゲリラ戦争が、政治戦争であり、革命戦争であることを理解できずに、ヴェトナム国民から嫌われているゴア・ディン・ディエム政権を軍事力で支えようとして、大変な失敗を犯した。著者はこの点を、フィリピンでフク（ハク）団がマグサイサイ大統領の善政によりみごと討伐されたことや、マラヤの共産ゲリラが、現地住民の支持を失って潰滅したことなどと比較して明快に分析している。なお巻末の資料もきわめて有益である。（猪木正道）